悪魔の契約

「もう別れようぜ、俺ら」
「えっ？」

私は思わず声をあげてしまうが仕方ないことだと思う。
突然目の前にいる彼氏にこんなことを言われて、『うん、いいよ』なんて答えたりとか普通できない。

「ちょ、ちょっと待ってよ！　どうしてそうなるわけ！？」
「由美子さぁ、正直うざいんだよ。付き合いだした時はそうでもなかったってのに」
「なっ！　ど、どこがうざいのよ。そんなにうざいと思われるようなことしてないわよ！」

うざいと言われた私はついムッとなるも、一応ギリギリ大声を出すのは抑えて話を続ける。
自分で言うのもなんなんだがうざがられるようなことをした覚えはない。
いや、まあ普通は本人はそんなことをしたつもりがないだけで、本人以外の視点からすると充分しているように見えるのだろうけど……それでも納得いかない。

「付き合う前と違って俺に対しての愚痴が多い、そのくせ他の女子と話すだけでキレるとか何様だよ」
「はぁっ！！」

せっかく大声を出すのを抑えていたのに、今度こそそれを抑えきれずに怒ってしまう。
当たり前だ、目の前の男の別れると言った理由があまりに理不尽なことで……相手が主に原因のことを、さも自分のせいにしているのが気に食わなかったのだから！

「愚痴なんか言ってない。宿題をやるようにとか髪もう少し短くしなさいとか軽い説教をしただけよ」
「じゃあ説教や女子との会話に対してキレることがうざい」
「校則は守っといた方がいいよって言ってるだけよ。そんなに難しいことを言っているつもりはないわよ」

学級委員長という役柄上、よく注意とかしてるため周りにはよく気難しいと言われるが、私に言わせれば当たり前のことを言っているだけだ。
むしろ私にこんな小言を言わせるようなマネを控えてほしいくらいである。

私だっていちいち互いに不快に思うようなことを口にはしたくないのだから。
そんなことを思いながら、ヒートアップしている頭を少しでも冷やすために一息つく。
それでも、すぐにもう一つのうざいと思われてる理由に対しての怒りで、冷やしたばかりの頭にすぐに火が点いてしまう。

「それと他の女子と話してるだけでキレるって言うけど、ただ単に話してるだけなら私は怒ったりはしません」
「ただ単に話してるだけだろ」
「あれのどこが？」

彼のおどけたような仕草に怒りのボルテージは上がる一方……自分がここまで怒るのは初めてかもしれない。
だけど彼が怒らせるだけのことは言っているのだもの……むしろ怒るなという方が難しいくらいである。

「明らかに色目使ってる話し方だったじゃない！　彼女がいるのに口説こうとかどういう神経しているわけ！？」
「はっ、そ、そんなんじゃねぇし！　勝手に色目使ってるとか勘違いするな！」
「じゃあなんで一瞬どもったの？」
「う、うるせぇ。とにかくもう由美子と付き合う気はない！」
「何よそれ……」

もう別れることに対してのわだかまりとかはなかった。
というよりも別れる理由を私のせいにされたことで、私の不満の矛先が入れ替わってた。

「じゃあいいわよ、お望み通り別れてやるわよ！　あんたみたいな奴はこっちから願い下げよ！」

別れることに対しての未練もなく、そう告げた私はそのまま背を向けて去ることにする。
直後のあいつの言葉を聞くまでは、もうあいつのことを振り向きもしないつもりでいた。

「ちっ、むかつくブスだったぜ」

……。
それまで私には縁がない言葉と思っていた。
それがよりにもよって付き合ってた男に言われるとは思っていなかった。

数秒間ショックで動けずにいた私は……それでも何か言い返そうと振り向いた。
でもあいつは立ち去ったあと……今から探そうにも見つけるのは大変そうだった。
……。
言われっぱなしであってたまるものか！
絶対に……絶対にあいつに綺麗だって言わせてみせるんだから！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ポカッ。

「痛っ！」

不意に目の前の闇にチカッと光るような感触と同時に頭上に痛みが伝わる。
それを合図にするかのようにぼやけながらも視界が広がってゆく。
って、あれ？　なんで目の前が暗かったんだろう？
私はさっきまであいつと話していたはずだったのに……。

「あっ大丈夫、由美子？」

それに聞こえてくる声はあいつの声ではなかった。
いったいどういうことだろうか？
……あっ、そうか。たまに見るあの夢か。

そう、夢……あの決裂から既に三年近くは経とうとしているのに未だにあの時のことが悪夢として私を蝕むのである。
私の彼氏……いや、元彼氏であった東城宗谷に別れ際にブスと言われたことは、その後の私に大きく影響をもたらすには十分な出来事だった。
それまでの私は少なくとも自分はブスとは無縁のものと思っていた。
家族からはもちろん可愛いと言われていた。
よく有りがちな自分がいないところでの自分の評価をたまたま聞いてしまった時も、気難しいだとか口うるさいだとかの自分でも重々承知していることこそ言われても、ブスとかそういったことだけは全く言われていなかった。
そのことで私は多少なりとも自分の容姿に自信は持っていたのだ。

――それだけに、あの言葉は私にとってショックだった。

当時高二の私はそれまであった自身が故に、ある程度しか気を遣ってなかった程度の外見に大きく気を遣うようになった。
眼鏡を付けているよりも素顔の方が美人だと気付いたらそれ以後はコンタクトの方に切り替えるようになった。
友達に相談してどういった髪形の方が似合うかなとか相談したりもした。
もともとスタイルはそんなに悪い方ではなかったのだけれど、スタイルをさらに良くするべく運動などもするようになったし……恥ずかしながらバストアップのための努力もしていた。
全くと言っていいほど気を遣っていなかったファッションに関しても、どういったものが流行なのかをチェックするようになった。
お化粧に関してもどういう風にすれば綺麗に見えるかも自分なりに研究していった。
そういった努力のおかげで、今では私は以前と比べて遥かに綺麗になったと言われるようになった。
あいつとはあれ以来一度たりとも会うことはなかったが、それでも少しくらいは充足感に満ちている。
あいつと今会ったら、私はしてやったりの笑顔であいつと対面できるだろう。
彼女と一緒にいるところだったら『彼女さんとごゆるりと楽しんできてね』と皮肉たっぷりに言える自信もある。
ただ……どうせあいつに会うことなんか二度とないだろうから私のやってきたことはそういった意味では意味のないことかもしれないけど。
というか三年も経った今になっても悪夢として出てくるなんて自分はどれだけあのことを気にしすぎているんだ、と思うこともある。
正直自分でも少しこの三年間の行動を思い出すと軽く引いてしまうことがなくもない。
でも仕方ない、と私は思い直す。
ただの自己満足に終わる可能性があったとしても、次あいつと会った時に見返せる容姿を私は手に入れたかったんだから。

「由美子ぉー、返事してよぉ」
「ごめん、ごめん。無視していたわけじゃないのよ。ちょっと考え事をしていただけ」
「さっきも聞いたけど大丈夫？　軽く叩いたつもりだったんだけど」

自分の中で勝手に疑問を解決して、勝手に過去を振り返り、勝手に思いを巡らせて、勝手に節目をつけた私はそのまま声が聞こえる方を振り向いてみる。
そこにいた声の主は……私の旧友、月野純子は心配そうな表情でこちらを見ている。

「大丈夫だって、純子。わざわざ起こしてくれてありがとう」

「『痛っ』なんて言ってたからちょっと力いれすぎちゃったかと思ったよ。それにずっと黙ってたし」
「それは今考え事してたって言ったばかりよ」
「あっ……そう言えばそうだったね」

今みたいに天然を思わせるようなちょっと抜けてる一面もあるが、この旧友はとてもいい人柄をしていると思う。

「純子はやっぱり天然ね」
「て、て、天然ちゃうわ」

天然と言われて彼女がどもりながらなぜか使いこなせるはずもない関西弁で否定する。
それを見ているとやはりからかいがいがあるなとついつい思ってしまう。
そして私は火の点いた嗜虐心(これは少し表現がオーバー気味な気がしないでもないけれど)をさらに満たすべく……ついでに私がこんな夕暮れ時にサークルルームの片隅での居眠りを余儀なくされた原因を作り出した張本人に事情を聴きだすべく、純子を問いただすことにする。

「それで……先約だった私を差し置いてまで他の人との用を済ませてきた純子さんのご用とはいったいなんでございましょうか？」
「それはごめんってー、わざとじゃないから許してよー」

私がわざと意地悪っぽく言ってみると純子はおどおどしながら半泣きで謝ってくる。

うーん、たまらない、この泣き顔。

仲間内でもこの旧友の反応が癒しとなるのかわざと純子を困らせることがあるくらいだ。
自分もこうやって旧友を困らせているあたり人のことは言えないけど、というかむしろ気持ちを共感できるくらいだけど。
しかしあまり困らせてるとそれはそれで後のフォローが大変なことになるので、私はその辺で嗜虐心を抑えておくことにする。

「まあ冗談はさておき本当にどんな用だったの？」
「『冗談はさておき』って何か引っかかるけど、まあいいや。あのね、由美子に今のうちに紹介したい人がいるんだ」
「紹介したい人？」

いったい誰だろう……時間とらせてまで紹介したい人というのは？

そう考えながら逸らしていた目を再び純子の方に向けてみるとわずかに顔を赤らめてもじもじしている。
夕陽のせいでそう見えただけかもと思えなくもなかったが、それにしては色が違う。

……なるほど、そういうことね。
こんなことならのろけを聞く前にもう少し純子をいじり倒してもよかったかもしれない。

「ははーん、さてはこれができたわね」
「……」

私が少しニヤリと笑みを浮かべながら小指を立てて純子に見せる。
すると彼女はさらに顔を赤らめてしまうも、わずかにこくこくと顔を縦に振る。

「やったじゃん、純子。このこのー」
「う、うん……ありがとう由美子……って痛い、痛いってば」
「うるさい、このこのぉー」

照れながらも狼狽える彼女を私は肘で軽く……ではないな、少し強めに小突いて見せる。
でも仕方ないよね……純子ったら彼氏が欲しいことをずっと前から呟いていた。
まあ所謂恋に恋焦がれている状態なのかもしれないけれども、それだけに彼を作ることに本当に強い思いを抱いていたのを私は知っている。
そしてその願いがやっと叶ったのだ……それは純子がとても幸せそうに見えるには十分な出来事である。

ちょっとくらいは私だって嫉妬するやい、この。

そういった感じでしばらく嫌がる純子をよそに小突いてから私は、もう一度彼女の方を振り向いて祝ってやる。

「本当におめでとう、純子」
「何度もありがと由美子」
「でもいちいち彼氏を紹介しなくてもいいんじゃない？」

彼氏ができたって発表することはあるかもしれないが、その彼氏を友人にわざわざ会わせなくてもいい気はしないでもない。
純子の性格的にただ自慢がしたかっただけなんてことはないだろうし……ムムム。

「あのね、その彼が私の友達だったら今後お世話になることがあるかもしれないって言ったんだよ」
「なるほどね」

まあ言われてみればそういうことがないとは言い切れない。
納得をした私は……とはいえ、家の夕食の時間のこととかを考えると話を進めることにする。

「なら早いとこその彼氏さんに会わせてくれない？」
「うん、わかった」

そう言って彼女は私の方から扉の方に振り向くと声をかける。

「宗谷くん、入ってきていいよ」
「そうや……」

どうやら純子の彼氏は私の元カレと同じ宗谷という名前らしい。

奇遇なこともあるものだ。

そんなことを考えていると扉がキーっと音をたてて開いていく。

「どもっす」
「……」
「……あっ」

入ってきた男を視界に捉えた途端、私の中での時が止まったような気がした。
向こうもこちらのことに気づいたらしく呆けた顔をする。

「それじゃあ紹介するよ、二人とも……って、どうしたの？」

最初はこちらの様子の変化に気付いていなかった純子だったが、何も言わない二人を見て二人の顔を見比べながら尋ねてくる。

「……と、と……」
「と？」

私の呟きに純子は思わず顔をかしげてしまう。
しかしそんなのお構いなく私は大声で叫んでしまうのだった。

「と、東城宗谷ぁ！！」

我が親友の彼氏は私が追い求めてきた因縁の人物その人であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……」
「……」

あの後、私は純子に昔ちょっと知り合いだった、と言って宗谷と話す時間をもらった。
純子も気を遣ってくれて先に帰った。
……とそこまでは良かったのだけれども。

なかなか話しづらいのよねー、これが。

とっとと怒りをぶつければいいだけの話なのかもしれいけどさ、それでもやはり気まずい雰囲気はあるというものだ。
知りもしない、そしてそんなに綺麗でもない女が宗谷の彼女だったなら堂々と言っていたかもしれない。
だが宗谷の彼女は私の親友だ。
私の親友が選んだ男と考えると、言おうと思っていたことも言えなくなるものだ。

「……」
「……」

とは言うもののいつまでもこの空気に身体を委ねるつもりはない。
……向こうから話しかけてほしいものだけれども、もう仕方ない。

「ねぇ、あんたさ……」
「由美子」
「……はい？」

いざ自分の方から声掛けしようとしたら、それにマッチするかのように宗谷の方からも声をかけてくる。
思わぬ事態だったためについ私は間抜けな声をあげてしまった。
しかし同時に声掛けしてしまうなどという漫画じみたこともあるものなんだなー。
っと、感傷に浸っている場合じゃなかったわ。
嫌な女の様で悪いけど、嫌味の一つや二つでも言わせてもらおうかな。

「いったい何？　昔振った女に何か未練でもあるのかし……」
「お前めっちゃ綺麗になったな」
「……はい？」

唐突な褒め言葉に間抜けな声パートⅡをあげてしまう。

「いやほんと驚いたぜ。最初見たとき由美子だって気付けなかったもん」
「そ、そう……」

……こうもあっさり褒められるとは思わなかった。
なんだろう……ここまであっさり褒められると、急にこいつに抱いていた対抗心だとか不満だとかがしぼんでいくように感じられた。

「うん、こんな美人をなんで俺は振ったんだっけ？」
「はぁ！？　あんた、あの時私をブスって罵っていったじゃない？」
「そうだったっけ？」
「……」

こいつにとってあれはよほどどうでもいい発言だったらしい。
私の転機ともなる言葉だったというのに、それをこの男は……。

「いや覚えてないけどさ、まあ悪かったよ、メンゴメンゴ」
「薄っぺらい謝罪ね」
「そう言われてもなぁ、覚えてねえし」

「はぁ……もういいわよ」

これ以上宗谷にあの時のことを追及しても意味はないだろう。
それにこう言うと自分が安い女みたいで嫌になるが……褒められたことで私の今までの努力は報われたように感じた。
そう思えた途端にこいつへのわだかまりは薄れた気がした。
なんか文句とかいう言う気になれなくなった。

「あれから結構綺麗になるよう努力してきたんだからね」
「ほほー、それでこんな美人さんになったというわけか」
「そうよ、そんでもってね……」

宗谷と会話を交わしながらも、私は今までのわだかまりよりも別のことを心配するようになってきた。
こいつは昔私と別れた経験がある。
そしてこのことが他の彼女との間に発生しえないとは言い切れない。
つまるところ、当面の心配事はこいつが私の親友を振るかどうかだ。
非が純子の方にあったら仕方ないと割り切るしかないだろうけれど、純子の性格やこいつのことを考えるとそうなるとはちょっと思えない。
順調にいくならばそれで良し、もし別れるようなことになっても少なくとも純子の傷は浅くしたい。
しばらくは二人のことを見守っておくか……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そういえばこの前宗谷くんと話してたけど、どういった関係なの？」
「この前？　ああ、あの時ね」

翌週、休み時間にいつもの通り純子と会話していた。
元カレだったというのはあまり言うべきではないような気がしたが、かと言って嘘は付きたくないしなー。

「ナ・イ・ショ」
「うわ、逃げられた」
「まあまあ名探偵コ〇ンでもあったじゃない。『女は秘密を着飾って美しくなるものなの』」
「ここでそういうこと言っても逃げてるようにしか見えないよー」

まあ実際逃げているわけだがここは茶化しておくに限ると思う。

「あはははは、まあご想像にお任せってことで」
「むー」
「そんな過去の検索してる暇あったら、宗谷とどれくらい進んだのか教えなさいよ」
「え、ええー！　そんなこと言えないよー！」

あたふたする純子をお構いなしに問い詰めることにする。

「さあ白状しなさい！　Aはもうしたの？　それとももうBやCをする関係にもう至ってるのっっ！？」
「えっと……そのAとかBって何のこと？」

ちっ、まだ純情な子だったか。
この思想の純情さを私が汚してやるのも悪くはないけれど、まあその辺りは宗谷に任せておくか。

「知らないなら別にいいわよ」
「うーん、よくわからいな……今度宗谷くんに聞いてみよ」

知った瞬間の純子の驚きの顔が目に浮かぶようでちょっと笑えた。

「あ、でもね。今日宗谷くんとデートしてくるよー」
「ふーん……もう宗谷とは何回くらいデートしてるの？」
「うんとねー……三回くらいかな」
「へー、もうそんなにデート行ってきたんだ」
「うん、宗谷くんとっても優しくて楽しいよー」

そんなことを言いながら純子はヘラッと笑う。
その様子を見てると純子は今幸せなんだろうなと思わされる。
同時に私にブス呼ばわりしてた宗谷も、昔とは変わったんだなと思わされる。

「あの宗谷がねー……」

ついつい以前のことを考えてしまうとそうぼやいてしまう。

「ん？　宗谷くんがどうしたの？」
「んー。昔私にブス呼ばわりしてた男が優しいと呼ばれるようになるとはねー、って考えると人は変わるんだなって思い知っただけよ」
「えっ！？　宗谷くんがそんなこと言ってたの？」

信じられないといった表情で純子は私の方を見る。
私の言葉でもなければ今にも『嘘だ』とでも言いそうな勢いである。

「昔の話よ、昔の話。それにそのことがあったからこそ、私は綺麗になる努力をしてこれたのよ」
「むー。それでも宗谷くんが失礼だったのには変わりないよ。今度怒っとくね」
「いちいちそんなことを言って、仲が悪くする必要はないでしょ。でも気持ちは嬉しいわ、ありがとう」
「えへへー、どういたしまして」

そう言って軽く笑いながら私と純子は歩き出す。
……ふと昨日のことを思い出す。
さっきから楽しそうにしてるとはいえ、やはりまだ不安がある。

「……ねぇ、純子」
「何っ、由美子？」
「宗谷といて楽しい？」
「もっちろん。とっても楽しいよ」

純子は何の戸惑いもなく嬉しそうに言う。

これなら心配ないのかなぁ……。
いやそれでもやはり見守っておいた方がいいだろう。
万が一ということもあり得なくはないし。

「それならいいわ。デートはごゆっくりね」
「うん、楽しんでくるよ」
「さてと、次の講義始まりそうだしさっさと行こう」
「あっ、待ってよ由美子ぉ」

純子の少し先を歩みだしたために、純子はおたおたとしながら私に必死について来ようとする。
だけど放課後のことを考えていた私はそんなの気にせずにずんずん進んでいく。

……純子には悪いけど今日のデート少しつけてみよ。
いやでも、それは友達としてどうかな……。
ムムムムム……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ンク……ンク……プハッ」

そして放課後……私は喫茶店でコーヒーを飲んでいた。
少し詳しく状況を説明するなら、店内のどこにも私の知り合いはいないという状況で、エスプレッソを飲んでいた。

「ハァ……何やってるんだろ、私」

純子たちの様子を見守ろうと決めたのは確かだったが、デートをつけることに踏ん切りをつけられなかった。
あの休み時間から悩みに悩んでいた。
授業時間もそのことが気がかりで、集中できずにいたくらいである。
そしてその挙句がこの様……端的に言えばいつの間にか放課後となっていた。

「ハァ……」

自分の情けなさに溜め息しか出てこないわ。
気持ちの整理はまだついていないままで街に繰り出してはみたものの、そう簡単に純子たちが見つかるはずもなく適当にそこらの喫茶店に入ったわけだが……。

「ハァ……」

おばさんでもないのにすることはコーヒーを飲むか溜め息をつくだけ……ダメだ、こりゃっ。

「ああ、このままじゃダメダメ。いい加減外に出よう」

いつまでもこうしていても何にもならない。
コーヒー飲んで

そう思った私は再び街に繰り出そうと喫茶店を出ることにした。
さっさとお勘定を済ませて店を出る。

さて……出たのはいいけどどうしようかな？　何するかなんて考えてなかったしなぁ。
今から探しに行くというのもあまり現実味がなさすぎるし……。

「あっ、由美子だ」
「おっ、本当だ。どうしたんだ、こんなところで？」
「……えっ？」

突然聞き覚えのある声に振り向くと、そこにいたのはまさに悩みの渦中の人物たちだった。
……なんで、このタイミングで会ってしまうんだろう、私は。
間が悪いと言うか、なんと言うか……喜ぶべきやら、悲しむべきやら……。

「……どうしたの？」
「あっ、ごめんごめん。こんなところで会うとは思ってなかったからちょっと驚いちゃってたの」
「へー。んで、また聞くようで悪いんだけど、何してたんだ？」
「あー……えっとねー」

流石に堂々と『尾行しようとしていた』なんて言えるわけがないしなぁ……どうしよう。
……やっぱり適当にごまかすしかないか。

「えっと、たまにはコーヒーを飲みたいなって思って」
「んっ？　別に街まで来なくてもインスタントとかで済ませても良かったんじゃないか？」
「べ、別にいいでしょ！　たまにはス〇バのコーヒーが飲みたい時とかもあるのよ！」
「わ、わかったから。そう大声出すなって」

街に来ている理由の一因が二人であることを悟られたくなくて、つい大声で言ってしまった……『隠し事をしています』って公言しているようでバカみたいだ。
さて、どう話題を切り替えようかしら……って、考える間でもないわね。

「ねぇ、純子」
「うん？　何っ、由美子？」
「……」

あれ、口にしようとした言葉が出てこない。

「……由美子？」
「うぇっ、な、何っ？」
「何って……由美子の方から呼びかけてきたんだよ」
「あっ、ごめんごめん。そうだったね」
「由美子、大丈夫？　ちょっと変だよ」

そう言われても仕方ないとは思う。
話題転換の内容は目的でもあった『デートは楽しいか』……遠まわしに言えば再度の質問になるが、宗谷といて幸せか。
だけど、いざそれを聞こうとするとなかなか口にすることができない。
自分で思っている以上に自分はチキンなのかもしれないな。
しかしこのまま黙ったままでいるわけにはいかないし……。

「由美子ってばー、本当に大丈夫？」
「……あっ……ごめんね。無視してたわけじゃないんだけど、ちょっと考え事してて」
「考え事……悩みとか？」
「そんなとこかなー……そうだ、私のことよりそっちのこと話してよ」

本題に入るまでの時間稼ぎ程度にしかならないだろうが、ひとまず私は話題転換することがようやくできた。

「そっちって、俺らのことか？」
「そうそう、デート中にお邪魔して悪いかもしれないけどさ、教えてくれない。ちょっとくらい自慢したって拗ねたりとかしないからさ」
「由美子と純子がいいならちょっとくらい付き合っても構わんが……純子はいいのか？」
「私はオッケーだよー」
「だそうだ。それで、俺らは何を話せばいいんだ？」
「デートで何をしてたかに決まってんじゃん」
「ふぅん、話すけど……物好きな奴だな、由美子も」

物好きか……そう思うのも当たり前か。
デートしてきた側が堂々と自慢してきても、修羅場でもないのにデート内容を聞き出すとか普通はしないし。
まあここにそれをしている私がいるわけだけれども。

「いいから、いいから。さっ、さっさと聞かせてちょうだい」
「えっとね、まずは洋服屋さんに行ってきたんだよ」
「ほうほう」

見ると宗谷の手に幾つか紙袋が見えるが、そのうち二つにユ〇クロのロゴが入っている。

「欲しかったのがあったんだけど、宗谷くんが買ってくれたんだよ」
「へぇ、そうなんだ。どんな服？」
「この前由美子に見せたファッション誌があったでしょ」
「ああ、あれね。確かに可愛かったけど、結構高かったよね？」
「うん。宗谷くんが半分くらい払ってくれなかったら買わなかったかも」

楽しそうにニコニコと微笑みながら純子は話を続ける。

「あ、でも、宗谷くんも結構買ってたよ」
「えっ、そうなの？」
「ああ、俺の方が純子よりたくさん服買ってたな」
「宗谷くんが洋服屋さんで買う時にお金が足りるか冷や冷やしたよー」

楽しげに話す純子を他所に、私は少し昔のことを思い出す。
……うん、まあ彼女がいるなか他の女に色目使うような奴だし、そりゃあファッションに気を遣うわけだわ。

うん？　色目を使う？

今内心何かに引っかかったような気がした。
いったい何だったんだろう？
それにあいつってそんなに大金持ちでもなかった気がするんだけどなー。

「それでね、洋服屋さんの次はー……って、由美子？」
「あっ、ごめん。ちゃんと聞いてるから続けて」

純子がこちらの顔を覗き込むようにしているのを見て、すぐに頭を切り替える。

「洋服屋さんの次はファミレスに行ってきたよー」
「ファミレス……なるほど、そこでイチゴパフェを奢ってもらったというわけね」
「ふぇっ？　なんでわかったの？　もしかして由美子ってサイコメトラーだったりするの？」

当たりだったのだろう、純子は信じられないといった表情でこちらを見ながら言う。
……普段からデザートを食べる時にほぼ間違いなくイチゴサンデーを頼んでるのに、今さらデザートに食べそうなものを当てられても驚かないと思うんだけどなー。
あとエスパーもののシナリオを読んだことがなければわからないようなネタを、使われてもちょっと困る。
ともあれ、そのあたりの突っ込みは割愛させてもらう。
むしろ悪ノリさせてもらおう。

「ふぅ……バレてしまったのね。ええ、そうよ。私はこれでも超度（レベル）が７のエス……」
「でね、その後はゲームセンターに行ってきたんだけど……」

向こうから振ってきたネタをスルーされるというのも辛いものだ……私なにか酷いことしたかしら？
デート中でなかったらお仕置きにいじりたおしてるところよ。
いじりたおしたい衝動を抑えて、私は話を続けることにする。

「ゲームセンターでやったワニを叩くゲームやエアーホッケーが楽しかったな」
「無難に楽しいからね、ああいったゲームは」
「楽しいよねー。あとプリクラ撮れるところもあったから一緒に行ってきたよ」
「おっ、いい感じじゃない」

プリクラか……友達と一緒に撮ったりすることもあるけど、彼氏と撮るようなことはしてないな。
まあここ三年はそもそも彼氏がいなかったのだから当たり前だけど。

「……」
「また何か言いたそうな表情を浮かべてるけど、今度はどうしたの、由美子？」

「な、何でもない！　べ、別にひがんでなんかないんだから！」
「ひがむ？　何のこと？」
「……気にしないで」

私はツンデレ口調で羨望を無事に（？）隠す。
……って、あれ？　純子の方もなんか楽しそうに話してる割に微妙にギクシャクしているような……。
一方で隣にいる宗谷はそれを見て楽しそうにしている……どういうこと？
そう思っていると、宗谷が口出ししてくる。

「純子ー、シューティングの時のことは言わな……」
「きゃあぁぁぁぁぁっっ！！　やめてええぇぇぇっ！！」

その途端、純子が半泣きでわめき始める。
シューティング？　なんで、そんなにわめくことになったんだろう？
疑問に思った私は尋ねることにする。

「シューティングでなんかあったの？」
「純子がさ、ホラーもののゾンビを見た途端に錯乱し始めたんだよ」
「だってぇ……あんなの怖いんだもん」
「でさ、錯乱してる時の純子の打ちっぷりは凄かったぜ。ゲームの方を見てないのにどんどんゾンビを倒してったからな」
「あんなの褒められても全然嬉しくないよー」
「へぇー……そんなことあったとはねー」

それなりに長い期間純子との付き合いがあるわけだが、純子のホラー嫌いを知ったのは初めてだった。

「宗谷くん、そんな風にからかったりしないでよー！」
「はは、純子はからかいがいがあるなー」

ふと私が黙っている間にも話をしている純子を見る。
まだ半泣きのままだが、どこか楽しそうにはしている。
あんな風に楽しそうにしている純子を見たことは私はほとんどない。

――ああ、そっか。

最初から話している純子のことを見ていれば良かったんだ。
そうすれば純子が幸せなんだなって、もう少しだけ早くわかってたのかもなー。
ここまで悩まずに済んだのかもなー。
こんなに心配する必要は無かったのかもなー。

でも良かった、純子が幸せだとわかって。

「もう、宗谷くんったらー。由美子ー、助けてよー」
「ええ、なんで？　とっても楽しそうじゃない」
「そんなー、由美子の意地悪ぅー」
「あはは、じゃあこれ以上お邪魔するのもあれだし、そろそろ退散するわ」
「えー、そんなぁ！」
「あはは。じゃあねー、お二方ぁ」

それだけ言うと私はさっさと二人を置いてさっさと帰ることにする。
純子のお楽しみを邪魔するという無粋なマネをこれ以上することもあるまい。
さっさと邪魔ものは退散するとしよう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「最近、純子とっても楽しそうにしてるね」
「そりゃあ彼氏ができてウハウハ生活の真っ最中だしね」

あれから一ヶ月くらい経っただろうか。
傍らに我が旧友がいないときに、知人の安奈と話していた。

「えっ、そうなの！？　初耳だったんだけど」
「つい最近噂……ってほどではないけど、それなりには知られてるわよ」
「はぁ……あの純子にねぇ。やっとあいつにも春が来たわけね」

純子とも親しい安奈は私の話を聞くと、ウキウキとしながら言う。気持ちはよくわかるけども。
安奈も純子のことを本当に良い奴だと思っている。
と言うより純子の知り合いに関して言えば、純子に対しての見解はほぼ同じである。

「何はともあれ、これで純子も……ムフフ」
「何考えてんの、あんたは」

安奈が下卑た笑いをするのでつい突っ込んでしまう。

――あれから二週間くらいは何だかんだで気がかりだった。
だから、私は純子と話す際に大丈夫なのかを表情からなんとなく悟っていた。
でも何回も話しているうちに、その心配はないだろうと思えてきた。

それから二週間くらいは純子のことを邪魔するまいと、こちらから積極的には会わずに、
向こうから話しかけて来たら対応しているだけの日々を過ごしている。
別に無視しているわけではない……でも、たまにはそういう期間があってもいいとは思う。

「ほら、安奈。さっさと次の授業行くわよ、品のない表情やめなさい」
「おっと、うっかりしてたわ……ジュルリ」

安奈の変態ぶりは相変わらずだなと思いつつ、廊下を歩いて教室に入る。
そんなにまだ教室に生徒は座ってないが、そんなの気にせずに前の方の席に座る。

「いつも思うけど由美子ってマジメよね」
「こんなの習慣にすればいいのよ」

安奈の言っていることを一蹴すると、ふと近くの席から会話が聞こえてくる。

「えっ、それ本当に？」
「噂では本当らしいよ……嘘だとは思うんだけど」
「でも実際に見つかってないんでしょ？」
「うん……まあ」

……？　何かなくしたのだろうか？
まあどうでもいっか。
そう思っていたら安奈が呟いてくる。

「またあの噂か」
「噂？　何のこと？」
「えっ、由美子、もしかして知らないの？」

「うん、知らない」

結構私は面識は広い方だから情報には詳しい方だったのだが……そういえばここ一ヶ月は結構純子のことで考えてたから、噂のこととかあんまり気にしていなかったな。

「由美子が知らないとはねぇ……なら聞く？」

途中から小声で話しかけてくる……この様子だと、あまり良くない方向性の噂なのだろう。でも知ってて損することもないだろうし、せっかくだから聞いておこう。

「うん、聞いとくわ」
「わかった。って言ってもそんなに長い話でもないんだけどね。十日前から山田先生が行方不明になってるのは知ってる？」
「ああ、そういえばなんか来てない先生がいるんだってね」

私は直接授業を受けていないのだけれど、どうも最近来てない先生がいるとかいないとか聞いた覚えはあった。
はっきり言って知らない先生だからそんなに興味はなかったけれども。

「で、その先生がどうかしたの？」
「あまり本気にしないでよ？　噂では悪魔によって消されたんじゃないかって言われてるの」
「うん、本当に本気にしたくない噂ね」
「由美子だったらそう言うと思った」

安奈はそう言いながら苦笑して……だが、そのまま話を続けてくる。

「でもね、この悪魔の噂は結構いろんな所で話されてるみたいだからあまりないがしろにしていい内容でもないんだよね」
「そうなの？」

あまり現実的には思えないことだからないがしろな扱いを受けるレベルの噂だと思うんだけどな。
とりあえず話を続けて聞くことにする。

「そうらしいよ。なんか悪魔の呼び方もちゃんと存在するらしいし」

「なんかいよいよもって嘘にしか見えなくなってきたんだけど……」
「そう言わないの。単純に真夜中の十二時に恨みがある人間のことを思いながら、心で悪魔のことを念じたら出てくるらしいよ」
「ずいぶん呼び出し方がはっきりしてるのね」
「私もそう思うわ」

誰かが悪意で流した嘘が蔓延したにしてはちょっと妙な気がしないでもない。
そう考えていた私の考えを読んでいたかのように安奈は続ける。

「この悪魔ね、興味本位で呼び出したりすると、呼び出した人が逆に殺されてるとも言われてるらしいわ」
「ああ、なるほど」

つまり変に呼び出すと自分が死ぬから誰も試そうとはせず、真偽は確かめられないというわけか。
別に試す気はないけど、バカらしいと言えばバカらしい。
そう考えた瞬間……。

――ゾクッ。

擬音で表現したらこういうのだろうか。
一瞬だったが自分の背を何かが走るような感覚にとらわれてしまう。
とてつもなく巨大な竜にでも睨まれたかのような恐ろしい状況を思わされた。

なんだったのだろう、今のは？

「どうしたの、由美子？　顔色悪いよ」
「ごめん、何でもないから気にしないで」

うん、きっと気のせいね……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから再び一週間。

「……そろそろ遊びに行くか」

休日の朝……幼少のころから密かにやってる合気道の鍛錬をしていたが、いい加減飽きてきたしそろそろ遊びに行こっかなー。
うん、そうしよう。思い立ったが吉日よ。
そんな呑気なことを考えて私は着替えて外に出ていく。
行く先など決めていないが、適当にほっつきまわろう。
道行く人の流れにしばらく沿っていると、時たま訪れるファミレスを見つける。
グー、と人に聞かれたらちょっと恥ずかしい空腹音も聞こえてきたので、これ見よがしにファミレスに入る。

「いらっしゃいませー、おひとり様で……あっ」
「んっ……あっ、純子」

店員さんの方を気にせずに話していたら急に素っ頓狂な声をあげるものだから、見てみれば旧友がウェイトレス姿をしていた。

「奇遇ね、こんなところで……って、バイト中に話しかけるのはやっぱりまずい？」
「ううん、今はお客さん結構少ないからちょっとくらいだったら大丈夫だよ」
「そう、ならいいんだけど。とりあえず席まで案内してくれるかしら、店員さん」
「わかった。お一人様ご案内でーす」

声を大きくして席の方まで連れて行ってくれる。
他の店員の『いらっしゃいませ』と言う声を BGM にするなか、宗谷はいるのかどうか見回すも流石にいない。
まあバイト中にまで押しかけてくるような奴でもないか。
そう考えているうちに席にたどり着いた私は、そのまま座らせてもらうことにする。

「ご注文がお決まりしたら、お呼びください。それでは失礼します」

続いて客が来店したので、純子は一通りのことだけしてからそちらの対応に行ってしまう。
メニューは決まっていたが、どうせだったらこういう時くらいは存分に話したかったので、純子の手が空くのを待ってから呼び出すことにする。

「ご注文はお決まりしましたか、お客様？」
「そんな堅苦しい話し方はしなくていいってば。注文は絶望のパスタで」
「そんなのメニュー表に載ってないよー」

どうやら純子はペペロンチーノの別名のことを知らないらしい……このネタ、今のところ誰も看破してくれないから複雑な気分だ。

「冗談よ、ペペロンチーノお願い」
「うん、わかった。それじゃあ、また後で」

そう言って純子はオーダーを伝えに行く。
絶望のパスタがくるまでの間、私は外の風景を眺めながらこの後どうするかを軽く考える。
また喫茶店にでも行こうかな、とか考えてたら純子が絶望のパスタを持ってきてくれる。

「お待たせしましたー。ペペロンチーノになります」
「だからそんな堅い口調じゃなくてもいいって。あとありがとう」
「ごめんごめん」

そう言って純子は周りを見渡す。
何をしてるんだろう、と思い私も見てみる。
まあおおかた店の忙しさを確認しているだけだろうが。

「今は大丈夫そうかな……」

どうやら当たりらしい……こういう時にドヤ顔ってすればいいのかなー。

「最近由美子と話すこと少なかったからちょっと寂しかったよー」
「ああ、だって宗谷との時間をあまり減らしちゃただのお邪魔虫じゃない」
「私は気にしないよー」

純子はニヘラと笑いながら言う……そう言われても気になるものは気になるんだけどなー。

「しかし純子がバイトかー。知らなかったわ」
「宗谷くんもここのバイトで知り合ったんだよー」
「あ、そうなんだ」

自分のお気に入りの店でそのようなことがあるとは……世界とは意外と狭いものだ。

「でもその割には宗谷はこの場にはいないわね……てっきり二人一緒に働いているものか

と思った」
「本当は土曜日は宗谷くんが一人でここで働いているんだけど、今日はずせない用事ができたから代わりしてくれないか、って頼まれちゃったの」
「はっ？」

ちょっとそれは酷くないか、と思ってつい声をあげてしまう。
普通彼女にバイトの代わりを頼むとかありえないと思うんだけど。

「で、まさかそれを快く引き受けたわけ？」
「？　勿論そうだけど」

不思議そうな顔でこちらを見ながら言う純子を見ていると、ついついため息が出てしまう。

「はぁ……」
「えっ、何か変かな？」
「あのね、チョッとはあいつの無神経さを罵ってもいいと思うわよ」
「由美子ー、宗谷くんは無神経なんかじゃないよー」

宗谷の悪口を言った途端、純子はぷくっと顔を膨らませる。
ここまで宗谷のことを想えるわけか……あの幸せ者め。
こんな一途な子を差し置いてまでの用事とやらを今度聞いてやらないと。

「あのね、普通彼女にバイトの代役なんて頼んだりはしないわよ」
「私は宗谷くんが困ってるなら何でも手伝うよ」

ここまで言い切るか……流石純子というか。

「ところで由美子ー、冷めちゃうよー」
「あっ」

しばらく放置していた絶望のパスタはすっかり拗ねていた。
その報いは味となって帰ってくる羽目に……はぁ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ファミレスをあとにして、続いて喫茶店に行こうとしたが……よくよく考えてみたら飲食

店二連続ってどうよ？
そう思えた私はしばらくその辺をほっつきまわり、本屋、洋服屋という感じで足を運んでいく。
だが、そのうちデパートに入ればよくね、と思えてきたので身近なデパートにそのまま入る。
浮浪者みたいに何かうろうろするのもあれだが、ヒマだから仕方がない。

「どっかに知り合いいないかなー」

そんな風にぼやいていると携帯音が聞こえてくる。
これ幸いと携帯を手にする。

「はい」
「あ、もしもし由美子？」
「あっ、安奈。どうかした？」
「由美子、今ヒマしてる？　というかヒマだよね？　ヒマだと言え」
「……怒らないであげるから、何をしてほしいのか言いなさい」
「これから合コンだったんだけど、一人がボイコットしやがったの！　お願いだから人数合わせのために来てください」
「まったく……」

なんで合コンでボイコットなんて事態が発生してるのよ。
別にそこにいる男になんか興味はないけど、安奈のためにも行ってあげるか。

「わかったわ、一つ貸しにしといてあげる。どこに向かえばいいの？」
「ありがとう。えっとね、ジョ〇フルにいるわ」
「オッケー、すぐに行く」

さっさと話すことだけ話して通話を終えるとさっさとジョ〇フルに向けて小走りする。
さいわいデパートからそんなに離れてはいないところだったから十分とかからずに済む。
店の前には安奈が時計を気にしながら待っている。

「安奈、来てやったわよー」
「あっ、由美子ー」
「って、わわっ！　急に抱き着かないでよー」

よほど困っていたのだろう……安奈は私を見つけるなり、駆け寄ってきて抱き着いてきた。
その際に香水の匂いがわずかに鼻をくすぐる……この香水は悪くないなとか思いながら、
私はゆっくりと安奈を離す。

「私はこういう場は慣れてないからどうなっても知らないわよ」
「そう言えば由美子って、美人のわりに彼氏いないのになんで合コンとか参加しないの？」
「簡単よ。なんかこういうので恋人を作るってのは何か違うなと思っただけよ」

まあ恋人いないやつら大集合みたいな感じが気に食わないというのもあるのだが、それは内緒。

「ふーん……でも、こういう機会だからどうせなら狙ったら？　由美子なら絶対落とせるって」
「遠慮するわよ。今もどうやんわりと断るかを考えているんだから」

そう言いながらも安奈について行くように店内に入っていく。
これ以上店の中にいるであろうメンバーを待たせるのは良くない。

「何はともあれ面子は揃ったわけだし、助かったわ……みんな、最後のメンバー連れてきたわよ」
「気にしなくていいわ……っ！！」

メンバーの顔触れを一通り見る時にとある人間の顔を見た途端、私は会話も勝手に止めてそいつだけを見てしまう。
別に一目惚れとかしたわけではない。
そいつは私が記憶している限りでは、まず間違いなくここにいてはいけない人物だった。
相手もこちらのことに気付き、ハッとした表情を浮かべている。

ギリッ。

冗談抜きにそれくらいの音がした。
あまりの感情の爆発に歯ぎしりしてしまったが、そんなのまったく気にならない。

――すっかり考えていなかった。

三年前、あいつは私という彼女がいながらも、他の女に色目を使っていた。

それを今もしている可能性を今まで考えていなかったとは不覚どころの話ではなかった。
本当に何をしてるんだ、私は！

「ど、どうしたの、由美子？　怖い顔してるけど何かあったの？」
「ッ、そっ、宗谷あぁぁっ！！！」

それでも……今まで無能だっとしても、我が旧友を彼女にしておきながら他の女を探しに来たこのバカを怒ることくらいは今からでもできるはずだ。
そう考えながら私は……自分で言うのもあれだが鬼のような形相で、宗谷のとこへツカツカと音をたてながら近づく。

「ま、待てっ、由美子！　これは誤か……」
「安奈！　悪いけどこの男に用事があるから連れてくね！」
「わ、わかった」

有無を言わせないくらいの勢いで安奈に言って、その返事が聞こえないうちに私は宗谷の手を無理矢理引っ張っていた。
ジョ〇フルをそのまま出て、その場で面と向かい合う。
こいつ……ただじゃ許さないわよ。

「あんたねぇ、いったいどういうことよ！？」
「別に？　どうってことねぇよ」
「どうって……あんた、よくそんなこと言えるわね！」

こいつ開き直りやがってぇ……。

「お前こそなんでこんなところにいるんだよ？　さてはいい男でも漁りに来たのか？　お前も人のこと言えないなぁ、ビッチが」
「あんたみたいな奴と一緒にするな！　あと話逸らしてんじゃないわよ！」
「なぁなぁ、なんだったら昔身みたいに俺ともう一度付き合ってみるか？　なぁに、もちろん純子には黙っといてやるからよ！」

……どこまでこいつ性根腐ってるのかしら？
私は怒りをそのまま行動に移してしまう。

パシーン！！

「ウッ！　ツッ、このくそが！」

私の平手打ちをまともに受けた宗谷はそのまま倒れそうになる。

「ふざけんじゃないわよ、この薄情男！　冗談でもそんなこと言うんじゃないわよ！」

はっきり言ってもうこいつの顔など見たくなくたっていたが、それでもまだこいつに言わないといけないことがあったから、そのまま話す。

「二度とこういうことすんじゃないわよ！　もし純子を傷つけるようなことしやがったら、ただじゃおかないわ！！」

宗谷の目を睨みながらそれだけを告げると、くるっと振り返り私はその場を去る。
これであいつが反省するとは思えないけど……それでも今最低限この場で私がすべきことはした。

お願いです、神様……少しでも、少しでもいいから事態がいい方向に転ぶようにしてください……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「由美子ー、大丈夫？」
「あまり大丈夫じゃない」

あれから十日くらいはまた経った気がする……でも神様とやらは私の願いを聞きいれてくれる気は欠片もないらしい。
事態は全くと言っていいほど良い方向に働いていない。
それどころか色々聞きまわってみたら、あいつが実は純子以外の女と既に何人か付き合っていることも判明した……とても純子にそのことを言う気にはなれない。
話してくれた人がほんの一握りしかいないあたり、あいつはその辺のことは結構ばれないように気を付けているらしい。
複数の付き合い情報を持っていた人間は一人もいなかった……だから、今まで私も気付けなかったのかもしれない。

いや、言い訳はよそう。

こうなってしまった以上、なんとしても純子がいずれ負うであろう心の傷をできるだけ浅くしないと。

「うーん……なんかあったなら教えてね。由美子のためだったら何でもするから」
「ありがとう、純子」

こんなに性格の良い子以外と平気で付き合うあいつのことが許せない。
純子の話によると、あいつはあの出来事の後からほとんど純子と会ってないらしい。
何か言ってやりたいところだけれども、今のあいつに何か言ったところで変わることなどないだろう。
それどころか下手なことしてあいつになんかされるのだけは避けたい。

「どうしよう……」
「何が？」
「あ、ごめん。気にしないで」

この子に悟られるのだけはもっとまずい。気をつけないと……。
とりあえず話を適当に逸らすか。

「そうだ。図書室に借りたい本があったからちょっと寄っていいかな」
「いいよー。私もなんか借りるよ」
「純子は何借りるの？」
「プ〇キュアの絵本」
「……」

『この年になってそれを借りるというのもどうかな』とか『そもそも学校の図書館にあるかな』とか突っ込みはあったが、疲れるだけなのでやめておこう。

「……？　なんで黙ってるの、由美子？」
「いや、何でもないよ」
「ならいいけど。そう言う由美子は何を借りるの？」
「私は参考書を探すだけよ」

授業でわからなかった部分を、わざわざ図書室で探さないといけないなんて面倒くさいったらありゃしない。
でも成績のためには仕方ないのことなのよね……はぁ。

「由美子って勉強好きなの？」
「まさか、あんなの大嫌い」
「その割にはまじめだから凄いよねー」
「褒めてくれるのは嬉しいけど、純子も勉強しないとダメよ」
「そうだねー、たまには勉強する」

話している間に図書室にたどり着いた私たちは互いに目的の本を探すべく別れる（内心純子の探しものは見つからないと考えているけど）。
しばらく探していると私は目的の参考書を見つけたので、さっさと純子と合流しようと図書室を歩き回る。
どこだろうと探しているうちに窓際に立ち尽くす彼女を見つけてしまう。

「純子ぉ。探してる本見つかった？」
「……」
「純子？」
「ふぇっ、ゆ、由美子？」

純子にしては妙に遅い返事だった。
最近私の方がこういうことが多かったのに……何かあったのだろうか？

「どうかしたの？」
「う、ううん。何でもないよ」

純子は否定してきたけど何か言い方が変だった。
そういえば、外を見ていたような……何か見つけてしまったのかな？

……あっ……まさか。

嫌な予感を感じた私はすぐさま純子が見ていた方を見やると、そこには想像していた光景が待ち受けていた。
楽しそうに笑っているどっかの女、そしてその横にいる我が旧友の彼氏はその女に話しかけている。

「……あんにゃろう」
「ゆ、由美子？　どうしたの？」

「純子……私、ちょっとあいつのところ行ってくる」
「由美子、宗谷くんに何するつもりなの？」
「勿論殴ってくる」

今度は容赦せずに殴ってやる。
私の中で、あいつへの怒りは限界を越していた。

「待って、由美子！　宗谷くんにそんなことしたらダメ！」
「なんでよ！？　純子はあれ見て腹立たないの？　彼女ほっぽり出して他の女と話してるだけとか、私だったら耐えられないわよ」
「違う。宗谷くんはそんな男じゃないよ。きっと何か事情があるんだよ。だから許してあげて……」

それなのに純子はあいつのことを必死にかばおうとする。
でも、その体は明らかにショックで震えてる。

「……ねっ、由美子？」
「純子……」

そのま純子は顔を私の胸に押さえつけて、グスッと声を押えて嗚咽を漏らし始める。

内心半ば自分が彼の心の中から消えてるんじゃないか、と疑っているんだと思う。
それでも彼女の純粋な心はそれを否定して、必死にあいつをかばおうとする。

……見ていられなかった。
今後もこんな風に彼女が傷ついていくんじゃないかと思うと心が痛かった。
こんな風に傷つくことを繰り返すことで彼女がいずれ壊れるのではないかと思うと辛かった。
だから早いところ終わらせてしまおうと思った。
どうせ傷つくなら、早いとこ振られた方がいいと考えるようになった。
そう考えた私はプルプルと震えたまま動かない彼女の頭を撫でながら、もう片方の手であいつ宛にメールを送った。
文面はこうだ……『純子をこれ以上傷つけるくらいなら、いっそ思いっきり振ってあげて』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昼の間には返信が返ってきた。
その内容は『夜七時半に△△橋の下の土手に純子と一緒に来てくれ』とのこと。
宗谷は素直に別れて、ことをできるだけ穏便に済ませてくれるのだろうか？
別にそうしたところであいつの最低の評価はどうかなるわけではないけど、由美子の傷が浅くなるのであれば助かるには助かる。
でも私を呼ぶ必要はないはずだ。
それなのに私を呼びつけるのは何かしらの目的はあるはず。
何もないことを祈るばかりだけど、いざという時は純子を守らないといけない。
まあ、流石に手出しはないだろうから武器とかは必要はないとは思うけど。
でも本当に何があるのだろう……正直嫌な予感がする。
だが、ここで行かないわけにもいかない。

私は約束の時間の五分前には純子と合流して指定された土手に来ていた。
昼のこともあってか、まだ純子の元気はない。
でも私も今純子になんて話しかければいいかわからない。
そのせいでただただ沈黙の時間が過ぎゆくだけだった。

「……」
「……」

ああ、こういう気まずいだけなのは性に合わないというのに。
いい加減あいつが来てもいい頃だとは思うのだが。
そう思って私は時計を確認してみる。

「……遅い」

時計を確認してみると既に五分くらいは経っていた。
呼び出した当の本人が遅刻とはいい度胸をしていると思う。

「おい、あいつらじゃね。宗谷が言っていたのって」

ふと少し離れたところから声がしてくる。
それもあいつの名前が出てきたから、つい気になって振りかえる。

「多分そうだな」

顔つきはそんな悪くないイメージだが、明らかに服装が今時のちゃらい男たちがこっちに来ていた。
どういうことだろう……あいつ自身がなんで来てないんだ。
何にしてもちょっと変だ。
私は警戒したまま、彼らに少しおびえる純子を背後に隠すようにしながら、話しかけることにする。

「あの、何か御用ですか？」

こう尋ねても、彼らはまともに対応せずに『どっちが好み？』とか話し始める。

「俺はあの怯えている子かな」
「ラッキー、俺はかばってるこの方が好みだったんだよ」

会話を聞いてる限りだとドキュン臭がする……これはヤバいかもしれないと、心の中で警報が鳴る。

「ねえ、君さ。俺らとちょっと遊んでかない？」
「暇させないからいいでしょ？」

やっと私たちに話しかけてきたと思ったら、即座にナンパしてきやがった……ふざけてるわ。
だが、背後にいる姫君がさらに怯えるにはそれは充分過ぎた。

「ゆ、由美子。この人たち怖いよー……なんで宗谷くん来ないの？」
「あいつの話は今はいいから！　私が何とかしてみせるから、あまり話しかけないで」

小声で純子と話すが、不覚にもその間に近づかれ過ぎて、ドキュン達が私たちの手を掴もうとする。

「きゃっ、ちょっ、放してください！」
「そんな怖がらないでいいじゃんかよ」

不覚にも対応が遅れてしまい、純子の手を片方の男に掴ませてしまう。

「あっ！　純子をはな……」

「せっかく可愛い顔してるんだから、暴力はしちゃダメだって」
「っ！」

純子を解放するべく殴りかかろうとすると、もう片方の男に手を掴まれてしまう。
どうやら頭に血が上りすぎてたらしい。
自分が得意なのは攻撃することではない……攻撃してきた相手に対してのカウンターだ。
自分は合気道を使えるのだ……よほど喧嘩なれしている輩でない限りは、二人はなんとか倒せるはず。
ましてそのうち一人は不意打ちできるのだ……余裕だ。

「……はぁっ！！」
「えっ、うわぁっ！！」

やはり武道とかの経験はなかったようだ。
体の軸はまっすぐになっていなかったから、やすやすと浮かすことができたので、そのまま川に放り投げてやった。

「あっ、この尼！」

純子を掴んでた方は、私がもう片割れをそのまま放り投げたのを見て怒り、さっきの私みたいに怒りにまかせて拳を振りかざしてくる。
好都合……感情に身を委ねて殴ろうとする輩ほど、相手しやすい敵はいない。
私を殴ろうとするその右手がぎりぎり当たるか当たらないかの瀬戸際で、私は体をターンする。
対象に当たらずに空振りした相手は、そのまま体の軸が盛大にぶれてよろけてしまう……そこを私は見逃さない。
空振りしたままの右手に即座に自分の左手を添えて、そのままその右手を引いてさらにふらつかせる。
ふらつきが大きくなったところでとどめと言わんばかりに、私は右手も添えてやり自分の体を捻るように、両手は大きく円弧を描くように動かすことで相手を派手に投げ飛ばす。

「うわぁ！！！」

先人と同じ道を辿るかのように残りのドキュンも川の藻屑となってしまう……別に死んではいないけれども。

「はぁ、はぁ……こわかったよー、由美子ぉ」
「もたもたしちゃダメ。あいつら川に投げ飛ばしただけで、全然無事なんだから！」
「じゃあ、どうするのー！？」
「決まってるでしょ、逃げるわよ！」
「う、うん。わかった」

まだ無事になったわけではないことがわかると、純子は再び緊張してしまうも私についてくる。
……土手をあがった頃には『あいつらどこ行きやがった』という声やそれとは別の場所からバイク音が聞こえてくる。
私は構わずに純子の手を強く握り返しながら街の方へと走る。
見つかったら今度はあいつらも油断などしないだろう……万が一見つかっても、私はなんとかなるだろうが、見つからないに越したことはない。
夜の街を振り向きもせずに私たちは駆け抜けていった。

十分くらい走り続けただろうか……いい加減息も切れてきたが、逃げ切ったと確証してもいいくらいには駆けたはずだ。
私たちは敢えて人気の少ないところに逃げていた。
どうせドキュン共のことだ……私たちが人気の多いところに逃げてると考えてることだろう。
今頃はまだ人通りの多いところを探しているか、とっくに諦めているかのどちらかだろう。

「あいつらが何だったのかよくわからないけど、今日はもう帰った方がいいでしょうね」
「でも宗谷くんがまだ……」
「バカ。ドキュン共があいつの名前を口にしていたのもう忘れたの？　絶対に宗谷の関係者よ」
「……」
「とりあえずこの辺に誰もいないかだけ確認してくるからちょっと待ってて」

黙り込んでしまう純子を一旦おいて、純子の家への道に奴らがいないかをそのまま確認しに行ってみる。
角を通り過ぎたくらいに向かいからやってくるバイクに気付く。
一台だったから大丈夫かなと思いそのまま目をはずす。
だが、そのバイクは段々とこちらの方へやってくる。
私の目論見がはずれでドキュン共の片割れだった場合を考えて、つい身構える。
２０メートルくらい離れたところでバイクがエンジンをかけたまま止まると、向こうから

話しかけてくる。

「おいおい、何逃げてんだよ」
「……っ！！」

ヘルメット越しに聞こえてきた声は確かに聞き覚えのある声だった。
だが想像していた人物ではなかった。

「さっき橋の近くで見張ってたけど、お前があんなに強いとは驚きだったよ」
「……あの時聞こえてたバイク音ってあんたのだったのね」

再び怒りがこみ上がってくる……無理もないことだとは思うけど。
約束の時間に来なかった純子の彼氏が、今頃のこのこと現れて何も思わないわけがない。

「あんた、いったい何がしたいのよ！？　私はこれ以上傷つけるのをやめろって言っただけでしょ！」

たったそれだけのことを頼んだだけなのにこいつはむしろ傷つくようなことをしでかしやがった。
こいつの考えていることが本当にさっぱりわからない。
だが、その疑問に対して返ってくる答えは非道なものだった。

「お前らさ、もうめんどいんだよ」
「……はっ？」

言っている意味がよくわからなかった……何よ、それ。
だが、こいつは私の思惑など気にせずに話を続ける。

「だからさ、せっかく俺に付きまとったりしないように新しい男を紹介してやったっていうのに……残念だ」

それだけ言ってあいつは『あはははは』と高笑いをしながら、そのままバイクで行ってしまう。

「何よそれ」

どこまで腐ってんの、あいつは。
大学に入って少しは良くなったのかと思ってたら、むしろあの時よりも酷くなってるし。
あんなに最低な奴にこれ以上期待することなんて……。

ザッ。
足音がしたので振り返ると純子がいつの間にか近づいてきてた。
少し悩んでる間に来ていたらしい。

「純子、いつここに……」
「由美子が行った後にどこかから話す声が聞こえてきたの……」

ということは、私とあいつの会話は聞いていないということになる。
でも、あいつは二度と会おうとはしないだろう。
会ったところで、純子の心をさらに傷つけるだけだ。

「ねぇ、由美子！　さっき話してたのは宗谷くんだったんだよね！？　宗谷くん、何か言ってなかった！？」

……それならもういっそ私がここでこれ以上の被害を抑えるしかない。

「純子！」
「な、何？」
「あいつのことは忘れなさい！」
「えっ、何を言って……」

私の言葉を聞いて純子は戸惑いが大きくなる……だが、私はそのまま話を続ける。

「あいつは純子のことをもう彼女なんて思っていないよ！　これ以上純子はあいつに関わってたら、絶対に苦しむだけだよ！」
「……」

純子は黙り込んでしまうが、私はそれに構わずに続ける。

「さっきの男たちだって、あいつが私たちにあてがおうとしてたんだよ！　そんな最低なことをしようとする奴だよ！　絶対にあんな奴と付き合ったりして不幸になるなんてダメよ！」

「……」

一気にまくしたてている間に、いつの間にか純子は顔を伏せていた。
無理もない。好きな男がそんなことしてたと知ったら、そりゃあショックを受けるに決まっている。

「……ぉつか……でよ」
「えっ？」

小さな声だったためについ聞き返してしまうと、純子は急に頭をあげて力強く叫ぶ。

「嘘つかないでよぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！！」
「じゅ、純子！？」

純子は明らかに敵意に満ちた目で私を睨んでいる。
……こんな純子を私は見たことがない。
少なくとも私に反抗するような意思を見せたのは初めてだ。

「お、落ち着いて、純子！」
「落ち着いてなんかいられないよ！！　そんなの嘘よ！！　宗谷くんはそんな悪い人じゃないもん！！　私のことを彼女と思ってくれてる人だもん！！　私のことを苦しめるような人なんかじゃないもん！！　私のことをちゃんと見てくれてる人だもん！！　私のことを裏切る人なんかじゃないもん！！　最高に良い人だもん！！　私のことを幸せにしてくれる人だもん！！」
「ちょっ、純子！」

これは異常だ。様子が尋常じゃない。
まるで何かに憑かれているのではとすら思ってしまう。
そこまで言った純子はそこで息切れした……わけではなかった。

「純子、お願い。少し落ち着い……」
「うっ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！　嫌だ、振られたくない、振られたくないよぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
「じゅ、純子！！」

本格的に狂いだしたかのように純子は頭を抱えて叫ぶ。

今の純子が何をしでかすかわからない……早く落ち着けないと。
私は想いに任せて抱き着こうとする。
だけど、純子がそれよりも行動を起こしてしまう。

「振られるくらいなら……振られるくらいならぁぁぁぁぁぁ！！！」
「だめぇぇぇぇ、純子ぉぉぉ！！」

純子は運悪く地べたに落ちていたガラスを手に取ると、そのままそれで手を切りつけようとする。
だが、間一髪で私は純子のことを止める……彼女のその手を掴むことで。

「止めないで……止めないでよぉ！」
「ダメ、そんなこと絶対ダメ！　私は親友を死なせたくない！！」
「……うぅっ、どうすれば……私どうすればいいのぉ？」

純子はそのまま嗚咽を漏らしながら泣き崩れてしまう。
そんな彼女を私はただただ抱き留める。
正直私もその答えを見つけることはできない。
でも私は少しでも進展を見出すためのことを考えていた。

こんなにこの子を傷つけるなんて許せない。
私の親友をよくも傷つけてくれたわね……。
あいつを絶対に許さない、許さない、許さない。

何としてでもあいつを殺してやる！！！！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

しばらく泣き続けてそのまま寝込んだ純子を家に送り届けてから、私は急いで家に帰った。
それからの私はとにかくネットを使って殺人手段を探していた。

殺してやる！
殺してやる！
殺してやる！！！

ただ、その憎しみだけが私の体を動かしていた。

でもそんなものいくら探したところで全然見つからない。
当たり前だ、そんなもの見つかればとっくに警察が取り締まっていることだろう。

もういい加減無駄だろうと思い始めてからは、自分で殺人方法を考えるようになった。
だが呼び出し方法、殺人手段、死体遺棄の場所……どれを考えても自分の想定には及ばなかった。
当然と言えば当然、そんなこと今まで欠片も考えたことなどなかったのだ……考え付くはずがない。

「どうすればいいのよ！？」

深夜十一時五十分……いくら考えても思いつかずに、苛立つだけの私はつい大声で怒鳴り散らす。

でもこれ以上考え付かない。
大学の化学製品をくすねるとか、鈍器を使うとか考えはしたものの絶対ばれてしまう。
別にただばれるだけなら私は構わないとすら思っていた。
だが、そんなことをして悲しむのは純子だ。
純子が悲しむのだけは避けないといけない。
……なんで純子が悲しまないといけないのだろう？
純子はあんなに良い子なのに、そんな子があそこまで深く絶望を味わうことになるなんて絶対おかしい。
なんで……なんでなの？
ここで苦しむべき奴は絶対あいつのはずなのに、当の本人は嘲笑ってすらいた。
私になんとかできるなら何とかしたい。

でも今の私は何もできないでいる。
悔しい。
悔しい。
悔しいよ……。
神様……お願いです。
純子を……純子を助けてあげてください。
そしてあいつを殺してやってください。

いや、願っても無駄か。
神様なんているはずがない。

だって神様がもし存在していたなら、この前祈った時に事態が良くなっていたはず。
でも実際は悪くなるだけだった。
なんだ、なら祈る意味なんてないじゃないか。バカバカしい。
何に祈ればいいんだ……ああ、いっそのこと、悪魔とかに祈ってしまうのもいいかもな。
……悪魔？

『あまり本気にしないでよ？　噂では悪魔によって消されたんじゃないかって言われてるの』

っ！？
安奈が言っていたことを思い出す。
悪魔……あの時はバカバカしいと一蹴してしまった。
普段の私だったらそうしていることだろう。
でも今は一刻も争う事態だった。
どんな噂だろうと藁にすがり付きたい気分だった。

「やってやろうじゃない……悪魔の召喚とやらを」

私は決心をして深夜１２時をゆっくりと待ち受ける。

……あと１０秒。
私は心に憎しみを再び思い描いていく。

殺したい！
殺したい！
殺したい！！！

……５……４……３……２……１……。
……０！
その瞬間突然あたり一面が暗転する。
……いや違う、これは黒い瘴気？
何なのかわからないままあたりが暗くなっていくが、ある程度暗くなると今度は明るくなっていく。
ただその灯りは照明ではなく、炎によるものだった。
そしてさっきまでいなかったものが現れる。
その姿は炎に包まれた巨鳥、だが全身から神々しさが伝わる。

これはもしかして鳳凰……いや不死鳥か？
そして不死鳥の口から奏でられる旋律はとても綺麗なものだった。
自分は音楽センスとかはそんなにないが、それでもわかる程に綺麗なものだった。

……なんて美しい声なんだろう。
この美しい声に比べたら何もかもがどうでもよく思えてきた。
この声と生涯共にありたい。

惹かれるように私は不死鳥のもとへ歩む。

この声が気持ちいい。
この声なしで生きていくなんて考えられない。

美しい声に快感を覚え、歩みはさらに早くなる。

ああ、あの口の中に入ればあの声と一緒に入れるのね。
あの声と一緒にいられるのであれば、もう何も望まない。
勉強も望まない。
合気道も望まない。
食事も望まない。
睡眠も望まない。
彼氏も望まない。
家族も望まない。
平穏も望まない。
友も望まない……友？

あっ！！

あの美しい声ですべてを忘れていた。
とても大切なことを忘れてた。
友を……純子を救うために。
そして何よりあの子を傷つけたあいつを……宗谷を殺したい！
殺したいんだ！！！

魅了から解放された私は、不死鳥の口の前で立ち止まり話しかける。

「不死鳥を模した悪魔よ！　私は殺したい者がいる！　貴方を召喚した私にあなたの力を貸してほしい！」

声をかけ終えた途端、不死鳥は全身が炎で隠れてしまい、その炎はやがて小さくなっていく。
炎が消えるとそこにいたのは不死鳥……の名残ともいえる炎の翼を身に付けた人だった。
これが悪魔……。

「我が名はフェネクス。汝の声に応え召喚された不死鳥の悪魔なり。よくぞ、我が声に捉われずに生き残った、少女よ」
「捉われてたら何かあったの？」
「そのまま我が口へと飲みこまれ、死に遂げるのみ」

……これが興味本位で召喚したら死ぬという所以か。

「無事生き残れた私は憎しみを晴らしてもらえるのかしら？」
「契約は違えぬ。汝の仇を殺してくれよう。だが考える時間を与えてやる」
「時間？　そんなのいらない。早く宗谷を殺して！」
「話はよく聞くものだ、少女よ」

そう言ってフェネクスは私に、不死鳥の紋様が入った黒い十字架を持つ右手を差し出して、続きを語る。

「我が手が持つは不死鳥の霊力の宿りし十字架なり。恨みを抱きながらこの十字架を握り砕くことで契約は成立。汝の仇は苦しみのさなか、冥界へと運ばれるであろう。だがこの契約は無償にあらず。汝が払う代償は死後の冥界送り」
「つまり私が死んだあとは、冥界に行くことになると？」
「左様。冥界にて汝の知人と会うことは決してない。その覚悟はおありか？」
「……」

死んだあとで純子と会うことはもう二度とない。
純子だけじゃない、家族も安奈も他の友達だって……。
でも……。

「この場で決めずともよい。深く考えその末に使わずともよいと結論に至ることもよし。さもありなん。その時は自然と十字架も消えるだろう」

「いや迷わないわ。私はこの場でこれを壊す」
「本当にそれでよいのか？」
「構わない」

私はフェネクスの目を見据えてはっきりと言う。

「純子がいつまでも苦しみを受けることなんてない。純子の苦しみを一刻も早く消せるなら、この場で壊して殺す」
「……見事なり、その決心。汝のその心意気に免じて、汝の仇を冥界に送るまでを見せてやろう」
「ちょっとしたサービスなのかしら。ならありがたく見させてもらおうかな。あいつが死にゆく姿を」

そう言うと私はニヤリと邪な笑みを浮かべながら、黒い十字架を破壊する。
その瞬間再びあたりの炎が消えていき、世界がもとに戻ろうとするなか美しき声が直接頭に語りかけてくるかのように聞こえてくる。

「契約成立。汝の声に応えたり」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「さぁてと、今からまた合コンかぁ」

由美子と純子への『紹介』は失敗に終わったが、まあ別にいっか。
これで二度と絡むことないわけだし。

「お前、よく今までそんな生活続けていけるな」
「よゆう、よゆう。なんたってこのツラだから」
「理不尽だ、なんで神はこの男だけをイケメンにしたんだ」
「ははは、俺は強運の持ち主よ！」

結構金遣いが荒い俺だが、それでも俺の金は無尽蔵……なんたって払うのは俺じゃなく、貢いでくれる女の金だから。

「でもさっき女振った、って言ってたけどなんかあったのか？」
「ああ、その女から搾り取れるお金はありそうだったんだけど、そいつに付きまとう奴が

むっちゃ面倒くさかった」
「惨いねぇ。友人の俺でも流石にちょっと引くねぇ。心痛まないのか？」
「はぁっ？　何言ってるんだか。女なんてな……男に貢ぐために存在するんだよ！」
「ヒュー、鬼畜ぅー。でも、そこに痺れる、憧れるぅ！！」
「ははは、褒めるな、褒めるな」

ああ、これだからやめられないんだよ、ヒモ生活は。
世間だったら最低とか罵られるんだろうが、んなこたぁどうでもいい。
いろんな金づる作って、自分の金が困らないようにしてればいいんだよ。
自分の好きなようにしてればいいんだよ。
はっきり言って、自制して世間でいい子ちゃんのふりしてる奴とか見てると腹が立つんだよな。
もっと自分に素直になればいいのによ、へへ。
そういう意味では純子なんか結構うざかったが、それでも俺に尽くすタイプという点ではなかなかの逸材だったのになぁ。
それだけは本当に残念だ。
でも悔やんでても仕方ないし、さっさと次の合コンで新しい女作っとくか。

「宗谷、あれか？　お前が行くって言ってたやつ」
「おう、あれだ。とっとと良い女見つけてまた貢がせようぜ」

あらかじめ、リサーチして狙い目がこの時間がヒマしているとわかったので、うまく時間をセッティングした。
あとはうまいとこ口説いてやるだけ……楽な仕事だな。

「さっさと店入ろうぜ。お前がいないと始まらないだろ」
「おう、すぐ行く」

先に行った二人に引き続き、俺も店の中に入る。
その途端、急に世界が暗転する……なんだ、何が起こっているんだ？
立ちくらみかなと思うが、明らかに様子がおかしい。
間もなく視界がもとに戻り始める……本当に何だったんだ？

「いらっしゃいませ、ご来店ありがとうございます」
「……どこだ、ここ？」

やっと戻ったと思ったら、まったく見覚えのない店にいた。
よく見てみると、先に入ったはずの二人も見当たらない。
何かが変だ。

「おい、あんた。俺の連れ二人が先に入ったはずなんだけど、どこに行ったんだ？」
「お連れの方でしたら、あちらにいらっしゃいますからどうぞ」

そう言って店員はVIPと書かれてある部屋を指さして、そちらの方に向かって歩き出す。
部屋の中が見えないのは気になるが、俺はそのままついて行くことにする。
と言うよりはそれしかすることがなかった。

「こちらになります」

店員がVIPルームの前で立ち止まると、それだけ言って俺に会釈して、そのまま顔をあげようとしない。
自分で開けろということか。
何が待ち受けているのか不明であるが、俺はためらいなくドアを開けてみる。

「ひっ！　うわぁぁぁぁぁ！！」

VIPルームにいたのは炎に包まれた五体の骸骨だった。
あまりに恐ろしい光景に俺は思わず叫んでVIPルームを出ようとする。
だが、さっきまで何もいなかった通路にはいつの間にかたくさんの骸骨が押し寄せていた。

「な、なんだよ、お前ら？　ちっ、近づくんじゃねぇ！！　って、あづっ、ぎゃぁぁ！！！」

通路から迫る骸骨につい気を取られていると、VIPルームの炎の骸骨に捕まってしまう。
く、苦しい。熱い。……何とかして逃げないと……。

「グッ……ぐあぁぁぁ、がぁぁぁぁっ！！」

でも離れようにもこいつらの力が強すぎて引きはがせない。
ダメだ、このままじゃ死ぬ……火傷がとんでもないことになる。

「だ、誰かぁ……」

誰か助けて、と言おうとするが息も満足にできなくて、声が出ない。
嫌だ、こんなところで俺は死にたくないんだ。
自分の好き勝手やっていきたいんだ。

「哀れなり」

突然美しい声が部屋に響き渡る。
誰の声かと必死に部屋を見てみると、中央にあった机の上に炎の翼をもった人が浮いている。
全身から神々しさが感じられたが、それと同時に禍々しさも伝わってくる。
直観が告げる……これは他の骸骨とかよりもよっぽどヤバい存在だと。
だが、骸骨に取り押さえられている俺は何もできずに、その不死鳥人間を睨むしかできない。

「欲を持つことは人間として当然の理。だが、過ぎた強欲は憎しみしか生まぬ。汝もまた憎しみを生んだ一人。我の召喚者との契約に基づき、汝が生んだ憎しみの罪をこの場で裁く」
「グッ……ガッ！」

まともに聞いている余裕はなかったが、明らかに危険な雰囲気を醸し出していた。
止めろ、止めてくれ。
だが、俺の意思に反して恐怖は目前まで迫っている。
さっきまで人だった奴は突然炎に包まれたかと思うと、次の瞬間巨大な不死鳥へとその姿を変えてしまう。
……ヤバい、逃げないと、逃げないと、逃げ……。
ボッ！！

「グッ、ゲッ、ウグァァァァァァァァァァ！！！！」

不死鳥が一たび羽を振るうだけで、熱気で骸骨共は消滅してしまうが、その熱気は俺の体をさらにぼろぼろにする。

「裁きの時だ。受けよ、炎魔葬送」

さらに大きな炎に包まれて不死鳥は俺の方めがけて突撃してくる。
止めろ、俺は普通の人間なんだ。そんな炎で焼かれたら俺は……俺の体が。

だが容赦なく不死鳥は俺にぶつかる。

「やめ、かっ……し……げっ……」

俺の体が消えて……い……。

薄れゆく意識の中、最後に声だけが聞こえてくる。

「未来永劫、紅蓮地獄でその身を焼かれ続けよ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ねぇ、また行方不明者が出たんだってね」
「そうらしいよ。文学部の宗谷って人が消えたらしくて……」

あの契約から数日、ついに宗谷の行方不明が本格的に広まり始めた。
真相を知っているのは当然私しかいない。
あいつは死んだ……でもそれが世間的にばれることは絶対にありえない。

良かった、本当に良かった。
私は無事にあいつを殺すことができたんだ。
純子がどうなってしまうかは私にも予想できないが、少なからず進展があってほしい。
もうあいつに捉われずに生きてほしい。
無事にことを成し終えた今となってはそれだけが私の願いであった。

「どこにいるんだろう？」

まだあの日から、純子とは会っていなかったから純子がどうなっているかは知らない。
死んではいないはずだが、今どうなっているんだろう？

「……あっ、いたいた。純子ぉ」
「……」

やっとのことで見つけた姫君は俯いたままで、顔の様子が見えないがひとまず無事でいることは確認できて良かった。

「純子、探したよ。ちゃんと学校に来てたから安心したわ」
「……」
「……純子？」

話しかけても純子はなかなか話そうとしなくて不安に駆られる。

「……由美子」
「へっ？」

突然純子が口を開いてくる。
話す元気があるなら大丈夫だろうな。

「宗谷くん、どこ行っちゃったんだろうね？」
「……」

その質問は当然出てくる内容だとは思う。
純子の思い人が突然いなくなったんだ……私が始末したとはいえ、少なからずショックではあっただろう。

「私はわからないわ」
「うん、そうだよね……由美子さ、悪魔の噂って知ってるかな？」

そっか、純子もこの悪魔の噂のこと知ってたんだ。
私は頭を軽くパリポリと掻きながら対応する。

「知ってるよ、バカらしいと思うけど」
「由美子ならそう言うと思ったよ……でもね、私思うの。宗谷くんは悪魔によって消されたんじゃないかって」
「……」

実際は合っている。
だが、私がしていないと言い張っている限りは問題ないだろう。

「純子には悪いけど、私はやっぱり非科学的だと思うし、もしそういうのがあったとしても宗谷は死んでもしかたない奴だと思うよ」
「……これ見てくれる」

純子が突然握ったままの右手をこちらに差し出してくる。
何だろうと思って体を乗り出してみると、純子の右手が開かれる。

「っ！！」

その右手から見えてきたものは不死鳥の紋様の入った黒い十字架……フェネクスの契約に使ったものだった。

「変なの見せてごめんね……でもね、これ噂の悪魔さんからもらった物なの」
「そ……そうなんだ」

そんな……純子が悪魔と契約の準備をしてるなんて……。
ふと純子の顔の方に振り向いてみると、いつの間にか彼女は顔をあげていた。
だがその顔は妖しさに満ちていた。

「私ね、なんとかして見つけるんだ、宗谷くんを殺した奴を……」
「……」
「私ね、宗谷くんを殺した奴を絶対あぶりだすんだ。そうすれば殺された宗谷くんもきっと私のことを褒めてくれると思うんだ」

どうしてだろう？
どこで間違えたんだろう？
私はただ純子のことを思っていただけなのに。
ただ友達を助けようと思っただけなのに。
なのに……なのに……。
どうしてこうなったんだろう？
間接的とはいえ、なんで親友に恨まれることになるんだろう？
なんで？
どうして？
こんなの酷過ぎるよ。
いくらなんでもあんまりだよ。
皮肉にもほどがあるよ。

「ねぇ、由美子もそう思うでしょ？」

誰か……。

「そうだね、きっと褒めてくれるんじゃないかな」

誰か……何とかしてください……。